

馮山雲エッセイ、前回の振り返り

今回は、わんりいニュー スレター 164号(2011.6)に載せた中国・陝北地域(陝西省北部)、延川県の農民画家、馮山雲^{フォン}氏のエッセイの後半部分をご紹介します。

馮さんは延川県の文化館で70年代末から働いた、民間芸術の指導者です。数多くの農民の手仕事のなかでも、彼は特に剪紙を「声なき農村女性の自己表現の手段」とみて重視し、多くの剪紙作家を育てあげました。

「小程村から出発して」と題されたこのエッセイは、彼が油絵画家、靳^{ジン}之林(北京・中央美術学院教授)とともに、県の最僻の山村「小程村」を民間芸術の保護・発信地にするべく設立に尽力した、「小程民間芸術村」をめぐる回想記です。

前半部は97年から、彼が師である靳氏の風景画の写生地を探して黄河沿いをめぐらううちに小程村に出会い、電気がないこの村には女性たちの素晴らしい手仕事が残っていると知って、師に諭されながら村をまわって村人たちに聞き取り調査を行う中で、自らをあたりまえに困っていた農民文化の豊かな世界観に驚き気づいていく過程が綴られていました。そんな彼らの興奮とは裏腹に、女性たちは剪紙図案の意味を説明するのも恥じらい、口をつぐむ始末——。後半はいよいよ2001年、民間芸術村が出来る段階へと進んでいきます。以下、エッセイの抄訳です。

「油灯」の下での剪紙学習班

私たちは村をめぐって聞き調べた状況を行政村の幹部に伝え、靳先生は村で学習班を開き、小程村の民間芸術をきちんと伝承していくよう進言した。見込みのある村の女性たちを励まし続けるうちに頑な村人たちの心も開き、好奇心をもつ者も増え始めた。

だが靳先生の話も、田舎者たちは理解できない。農民の文化指導に長年従事してきた私の力が発揮されたのはまさにこのときだった。生粋の延川方言で味つけして笑いを交えた「民間芸術」の話で興味を惹き、同時に靳先生のアドバイスが人々に届きはじめると、少しずつ効果がみえてきた。

やがて家主である程文の窑洞は每晚、向こう谷からも人が訪れて室内からこぼれた人々が中庭に坐り込むほど盛況になり、まるで結婚式のような賑わいとなった。隣村の七十代の程秀珍さんは毎日早々とやって来ては灯りの下に陣取り、長年しまいこんでいた沢山の剪紙をみせてくれた。「これは自分が何年も大切にしてきた古い型紙で、祖先から代々伝えられたものだ。あんたたちの役にたつかねえ」と程ばあさん。

靳先生は皆に見えるように程さんの剪紙を広げると、「これこそが古い黄河文化だ。まさか我らが村にこんなにも古い黄河文化があったとは！すばらしい剪紙をもってきてくれた程さんに感謝！」と語った。

「いいって言うてくれるのはあんただけだよ。以前は外に出すなんてもってのほかだった。見られたら“四旧”といわれて命取りだった」程ばあさんは嬉しそうに答える。

「これこそ私たちのもっとも伝統的な民族文化だ。今さら国が保護しても間に合わない」と靳先生。喜んだ程ばあさんは次に、結婚のとき自らが刺繍した枕をとりだした。配色や刺繍ともに素晴らしい出来だった。

手にとって私は「この花の刺繍にはなんでこんなにたくさんの結びこぶがあるの？」と尋ねた。年とった婆さんたちはそれを聞くなり声をあげて笑った。「結びこぶのない刺繍は嫁いできた嫁が子どもを産まないようなもんだ」

靳先生は「学問というものは、問いながら学び、学びながら問うものだ。真剣に調べて初めて、真に学

問を手にできる」と嬉しそうに頷いた。その晩は夜が更けても誰ひとり帰ろうとせず、家主の程文は妻に度々灯りの油を注がせねばならなかった。

連日の大盛況に、程文はやむなく部屋の壁を壊して隣同士の二つの窑洞をつなげ、人が集まれるようにした。設備はないに等しく、集まった剪紙はたった一つだけの小さな卓袱台上にはひろげきれず、壁にまで貼りだされた。こうして熱気をおびた学習班は男どもさえも魅了し、民歌や秧歌で場を盛り上げ、靳先生もそこに違和感なく交じて夜な夜な楽しい時間が過ぎていった。

✂️「民間芸術村」の看板がかかった日

小程村から徐々に、民間芸術で名を挙げる者が出だした。この知らせが県の上層部まで伝わると、宣伝部の幹部たちが視察にきて小程村の剪紙を買って帰るようになった。これは小程村の人々にとって天地がひっくり返るほどの驚きであり、これまで自らを卑下してきた村人たちを、小程村に文化組織を作りたいと申し出るまでに活気づかせ、「小程民間芸術村」の設立が目指されることになった。この案をけしかけた老先生の狙いが的中したというわけだ。

だが現実には、場所が問題になった。貧しいこの村には共同利用の窑洞がなかったのである。程文が兄弟に相談して、古い土窑洞を提供して活動室に作

り替えることを決めた。「民間芸術村ができれば県政府が電気を通してくれる！」そんなオイシイ知らせが村に伝えられるやいなや、金があるものは金を出し、力を貸せる者は労力を惜しまず、小学生までもが学校そっちのけで作業に加わり、準備が進められた。

民間芸術村の完成を村人は指折り数えて待ちわびた。剪紙学習班以外にも秧歌隊が結成されるなど、民間芸術の活動はますます活発になった。程江という秧歌の名手は俄然忙しく動き回り、自身だけでなく家中の者が家業を措いてこの行事のために集まった。彼は秧歌のなかで自らをこう歌っている。

程江は何をやってもだめ人間/商売やってもお客は閑散にぎやか大好きお祭り男、女房引き連れ馳せ参じ——

「民間芸術村」設立の日が迫ると、女性たちは以前にも増して熱心に剪紙制作に打ち込んだ。郝秀珍の夫、安小も鉛筆を一本一本削って女房に差し出す。以前、彼は女房が絵を描くことに反対し、彼女の鉛筆をこっそりと折っては捨てていたが、状況は一変した。鉛筆削りどころか、食事の用意までかかって出るようになったのだ。

中卒の郝秀珍は村の女房連中のなかでは学歴が高い一人で、小程村に嫁いで来てからも暇をみつけてはこっそりと絵を描き続け、後ろ指さされても



「靳先生の剪紙学習班」 賀彩蓮/作(小程村在住)



「電気が通った日」 賀彩蓮/作(小程村在住)

へっちゃらだった。肝っ玉の坐った彼女が
靳先生の来訪をきっかけに剪紙をはじめ
ると、彼女の積極性が村の女性たちに伝染し
ていった。そんな彼女をみんなは民間芸術
村の美術組長に選び、彼女の責任感は一層
強くなった。

2001年12月13日は、小程村の人々
にとって忘れ難い一日になった。この日、小程
村には近隣のみならず、遠くは山西省の黄
河沿いの地域からも山のように多くの人々
が訪れ、山道は詰めかけた人々で動けぬほ
どだった。「バンバン、パンパン!!」と爆竹が
鳴り響く中、靳之林先生はじめ幹部たちが
村の入り口に高々と「小程民間芸術村」の看
板を掲げると、集まった人々から割れんば
かりの拍手が沸き起こった。「お静かに、お
静かに!」というアナウンスも人々の歓声に
かき消される。靳先生がすっと立ち上がり、
手をふって人々を制するとようやく静
けさがもどった。最後に程文が民間芸術村
の村長になることが告知されると、人々は
再び拍手喝さい、抑えきれずに程江が前に
躍り出ると秧歌隊がこれにつづいた――。

✂️「民間芸術村」の看板がかかった日

「小程民間芸術村」設立の喜びさめやらぬなか、全
国剪紙芸術年會がこの村を視察に来ることになっ
た。2002年2月27日(農歴1月9日)、この日を小
程村の人々は生涯忘れることはないだろう。市や県
のみならず、中央からも人がくるなんて、かつては
想像も出来ない事だった。ましてや外国人までやっ
てくるとは! 村中の人々が家を清潔に整え、出来る
限りのもてなしで客人を迎えようと、米酒、豆腐、焼
き豚といった正月料理を準備万端、この日を迎えた。

当日、人々は朝も寒いうちから乾坤湾から聖覽山
を望み、じっと待っていた。山の谷間から、カブトム
シの隊群のように車が一台、また一台と砂埃を舞い
あげ近づいてくるのが見える。村の幹部の合図で秧
歌隊と村中の老若男女が一斉に列を組んで出迎え
開始。熱気で湧く山道に、車が続々と到着した。世



碾畔博物館の展示品の浮袋を実演してくれた馬おばさん



電気が通った今、歴代の照明器具は博物館の展示室に

間慣れしていない小程村の人々たちはどよめき、楽
器隊は緊張のあまりリズムを崩し、秧歌隊もわれを
忘れて隊列を乱した。

客人たちが手を振りながら村に足を踏み入れる
と、待ち切れない村人たちが両手いっぱいの棗を抱
えて「食べる、食べる」と通せんぼ。それを見た同行
の役人が叫ぶ。「みなさん、今回はもっぱらあなたた
ちの棗をいただきに伺ったので、焦る必要はありませ
ん!」村人たちがようやく落ち着きを取り戻すと、
「民間芸術村」村長の程文が号令をかけた「みんな慌
てずに配った名簿にしたがって、自分の家に決めら
れた客人を迎えるように。」こうして、客人はようや
く宿泊先の家におさまった。

程瑞の家の女房、花華は家で火を焚いて客人を
待っていた。夫が客人を連れてもどるや否や驚き立
ちあがって、黄河沿いの方言で言った。「ここ数日は
待ち過ぎで死にそうだったよ。アイヤー! こんなす
ごいお客、どうやってここまで来なされた?」

スイスの駐中大使が礼儀正しく「黒啗 (Hello!)」と話しかけた。こわばって「まだ空は暗くないよ。今、朝食を準備してるところだよ」と言う花華。「挨拶だ。ニーハオという意味だよ」と慌てて説明する通訳。「アイヤー、驚いたじゃないか！」夫の程瑞に「わしらは聞いても分かんからやたらに話したら笑われるって、言っておいただろ」と釘を刺され、花華ははずかしそうに顔を赤らめた。スイス大使先生は彼らの会話を察すると腹を抱えて笑って一言、「ノープロブレム！」程瑞夫婦はつられて笑いながらも、通訳をみつめ助けを求めた。「大丈夫だって。」通訳がつかさず説明すると、その場にいた皆に笑みがこぼれた。

外国からの客人たちはオンドルの上に坐るのが苦手だと予め聞いていた彼らは、窑洞の奥にテーブルを用意し、そこに正月料理をならべておいた。花華はスイス大使になみなみと米酒を注いだ。

大使先生は笑ってまた「黒啗 (Hello!)」と言った。花華は今回は動揺せずにこう言った。「米酒だけは、何が何でもあなた様に召し上がってもらわねばなりません。」大使先生が慣れない中国語で「謝謝」と答えると、室内は大爆笑に包まれた。

この日、小程村には剪紙、刺繡、^{フトゥイホア}布堆画(パッチワーク画)、布の玩具、絞り染め、藁細工、布靴などさまざまなものが並べられ、遠くから来た客人たちの目を楽しませた。特に「乾坤湾」と題された花華の剪紙は、黄河沿いで棗を収穫する人々、その傍らで靳先生が黄河の風景画を描き、女たちが民間芸術活動室で剪紙をし、中庭で秧歌隊が練習に励むといったこの村の光景をダイナミックに描き出し、客人たちの評判を呼んだ――。



「小程民間芸術村」、後日談

エッセイ「小程村から出発して」はこの後、靳之林氏がある古窑洞で1200年前と推定される古い石彫を発見するエピソードなどが綴られますが、私からの紹介はここまでにしませう。

文章は最後に次のような力強いメッセージで締めくくられます。「民間芸術は人々の生活から切り離されたとたんに、生き活きた生命力を失ってしま

う。それはまるで深い眠りについた古代の岩画のようなものだ。民間芸術は人々が喜びをもって作り出す時に、民衆によって応用されることで、自然と発展していくものだ。」

馮さんと靳先生の小程村での活動はその後、隣接する碾畔村の空き窑洞を生かして黄河流域の生活文化博物館(エコ・ミュージアム)を村人主体で設立するプロジェクト、さらに2004年には延川県全県の村の剪紙大調査など、壮大な計画へと発展していきましました。小程村からは数人の著名な剪紙作家が出て、今は県城に居を移して活動を続けています。電気が通った小程村は今では舗装道路も整備され、村の麓には窑洞をかたどった休暇村も出来て観光地化し、村の幾つかの家は農業の傍ら、「農家楽」として観光客を迎え入れています。

ところが馮氏は後に、自らが作った小程民間芸術村や碾畔村の博物館の活動を振り返り、反省もあると語っています。

電気を通す、という悲願のために邁進した村人たちの「民間芸術」熱は長くは続かず、ボランティアに近い村営博物館の維持管理は年々難しくなっており、また「民間芸術」で稼げる家とそうでない家との間に以前にはなかった経済格差が生れ、村人たちの関係そのものが変化してしまったと言うのです。

「次に博物館を作るチャンスがあれば、住民が新しい村に移住したことで村ごと捨てられ、忘れ去られたように残されている古い窑洞群を手を加えずに、そう、碾畔村のように展示室として整備したりせずに、そのままの姿で保存するような、そんなやり方を選ぶだろう。」そう話す馮さんの複雑な表情は、多くの問題を投げかけるものとして、深く私の印象に残っています。

✿丹羽朋子(にわともこ)――

中国の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」を運営。本エッセイのバックナンバーは一芯社のサイト(<http://yixinshe-books.jimdo.com/>)に掲載中です。